

一席 沖縄県知事賞

組踊「太鼓の縁」(teekunu yin)

西岡 敏

あらすじ

十七世紀初頭、日本から琉球に渡ってきた初老の念仏僧・恵中（ケーチュー）は、念仏を唱え、太鼓や鉦を打つ門付け芸をしながら、各地を巡り、食うや食わずの渡世を続けていた。ある日、道端に倒れていたところ、首里下級士族の青年・虎千代（トゥラジュー）に助けられる。恵中が打ち鳴らして伝わってくる太鼓と鉦の音にただならぬ興味関心を抱いていたのであった。

助けたことが縁となつて、恵中が身を寄せている安仁屋村の寺に太鼓を習いに通い始める。寺には孤児の亀松（カミマツイ）が引き取られていた。虎千代は瞬く間に恵中を越えるほどの太鼓打ちに上達する。折しも薩摩から軍が攻め入る。許婚の真加那（マカナ）との別れ。虎千代は出陣する。

真加那たちは再び虎千代が戻ってくるのを待つ。しかし、虎千代はすでにこの世には帰らぬ人となっていた。亡霊となって現れた虎千代は、真加那に孤児・亀松のことを託す。虎千代を先頭に戦に斃れた人たちが勇ましくエイサー太鼓を打ち鳴らしながら、海の彼方、ニライカナイへと去ってゆく。

登場人物一覧

虎千代 (turajuu、首里下級士族の青年)

真加那 (makana、虎千代の許婚)

恵中 (keechuu、念仏宗の僧侶)

亀松 (Kaminatsi' 孤児)

童たち (3名)

首里からの使者

家からの声

エイサーシンカ

☆脚本

【第1部】

(念仏僧・恵中、橋掛より出る)

◇本嘉手久節「出羽の歌」

海も野も山も umin nun yaman

眺めれば美らぎ nagamiriba churasa

弥勒世や近く mirukuyuya chikaku

なてが居ゆら natiga wuyura

(恵中、太鼓と鉦を打ち鳴らし念仏を唱えながら、家を巡っている。)

○恵中

これや安仁屋村の kuriya annyamuranu

座主恵中。 zaasi keechuu.

あが遠大和から agato yamatukara

渡て来ち五年。 watati chichi gunin.

御仏の道ゆ mifutukinu michiyu

説ち巡て居すが。 tuchi miguti wusiga.

わが暮らし方や waga kurasigataya

極貧のままに、 gukufinnu mamani,
鼓鉦打ちやい tsizin kani uchayi
念仏ゆ唱て、 nimbutsiyu tuneti,
托鉢ゆ乞うて takufatsiyu kuuti
御情けに縋て、 unasakini sigati,
日々の物食みや、 fibinu munu kamyayi
命繋ぢ居もの。 nuchi tsinaji wumunu.
よも座主で言ゆる jumu zasidi iyuru
人もまた居すが、 fitun mata wusiga,
ひたすらに甘世 ftasirani amayu
乞い願て居もの。 kuyinigati wumunu.
今日や一口も chuuya ftukuchin
食でや居らぬすが、 kadiya wuransiga,
仮令道中に tatuyi michinakani

哀れ死にゆれども、 awari shinyuridumu,
これも御仏の kurin mifutukinu
御心のままに mikukurunu mamani
またも巡り来ち matan miguyichichi
結ぶ御縁。 musibu guyin.

（恵中、念仏を唱えながら、ある家の門前に行く。〔念仏の詞章は宮良
当壮「沖縄の人形芝居」より引用〕）

うう尊と。 uu tootu.
千年の仏加那志 shinnimnu futukiganashii
良い事の神ど yii kutunu kamidu
御美遣し untsikeeshi
歩つちやべぐる。 acchabiiru.

親の御恩や

yyanu guwun ya

深しもの。

fukashi munu

父御が御恩や

chichiguga guwun ya

海深く。

umi fukaku.

母御が御恩や

fafaguga guwun ya

山深く。

yama fukaku.

海の深さや

uminu fukasaya

悟ららぬ

saturaran

山の深さや

yamanu fukasaya

悟ららぬ。

saturaran

南無阿弥陀仏や

nam amidabutsiya

弥陀の仏。

miidanu futuki

されされ、

sarisari,

ゆしれやぐら。

yushiriyabira.

これや

kuriya

托鉢の僧、

takufatsinu soo,

御情

unasaki

御給びみしやうれ。 utabimishoori.

○（家の奥からの声）

こまや何も無らぬ。 kumaya nun neran.

帰れ帰れ。

keeri keeri.

（惠中、別の家の門前に行く。）

○惠中

されされ、

sarisari,

ゆしれやべら。 yushiriyabira.

これや kuriya

念仏の僧 nimbutsinu soo,

御情 unasaki

御給びみしやうれ。 utabimishoori.

○（家の奥からの声）

こまや何も無らぬ kumaya nun neran

帰れ帰れ。 keeri keeri

（惠中、さらに別の家の門前に行く。）

○惠中

されされ、 sarisari,

ゆしれやべら。 yushiriyabira.

これや kuriya

托鉢の僧。 takufatsinu soo.

○（家の奥からの声）

やかれよも座主小、 yakari jumu zasigwa,

帰れ帰れ。 keeri keeri.

（惠中、更に歩くが、やがて疲れ果て道端に眠り込む。）

◇仲村渠節（『琉歌全集』一〇二八番歌より、下句のみ引用。）

さらば草枕 saraba kusamakura

とり声待たな tuyigwi matana

(この間に首里士族の若者・虎千代、橋掛より出る)

○虎千代

今出ぢる我身や nama 'njiru wamiya

花城里之子が hanagusiku satunushiga

嫡子 chakushi

虎千代どやゆる。 turajuudu yayuru.

すだし両親や sidashi futa uyaya

この我身ゆ残り kunu wamiyu nukuchi

浮世つれなさや uchiyu tsirinasaya

この世失たうて kunuyu ushinatoti

馴れし面影の narishi umukajinu

日々繁さあすが、 fbi shijisa asiga,

我すた元祖から wasita gwansukara

能羽楽の道 nufani gakunu michi

思はまてちちやる umihamati chicharu

事もまた有もの。 kutun mata amunu.

父母の思い chichifafanu umui

肝に思染めて、 chimuni umisumiti,

首里みやだいの拜ど shuyimedeyi wugadi

御主加那志御側、 ushuganashi usuba,

手墨学問と tisimi gamuntu

歌と踊りしち、 utatu wuduyi shichi,

立身の道ゆ disshinnu michiyu

重ねやい居ゆん。 kasaniyayi wuyun.

聞けば此の頃や chikiba kunuguruya

噂事なとる uwasagutu natoru

大和から座主の yamatukara zasinu

鼓鉦打ちやい、 tsizin kani uchayi,
御仏の道ゆ mifutukinu michiyu
説ち巡て居すが、 tuchi miguti wusiga,
さても太鼓鉦の satimu tekuganinu
をかしや面白さ。 wukasha umushirusa.
大和よも座主で yamatu yumu zasidi
悪し様に言ゆる ashizamani iyuru
人多さあすが ftu ufusa asiga
沙汰しげさあすが、 sata shijisa asiga,
能羽の道だいもの nufanu michi demunu
楽の道だいもの。 gakunu michi demunu.
何がなしち彼に nugana shichi arini
習い欲しやの。 narayibushanu.

（虎千代、道端に寝る僧・恵中に気付く。）

てだや西さがて tidaya iri sagati
暗くなて来やすが、 kuraku nati chasiga,
あまなかい居すや amanakayi wusiya
あの座主やあらに？ anu zasiya arani?

（虎千代、恵中のところに進み、彼を起そうとする。）

されされ座主加那志。 sarisari zasiganashi.
既に夜なやい sidini juru nayayi
長蛇も多さ。 nagamunun ufusa.
こまをとて寝れば kumawutoti niriba
危しやあやべもの。 ukasha ayabimunu.

たんで座主加那志
起きて給ばうれ。

tandi zasikanashi
ukiti tabori

○恵中

わらべ声のあすが
誰がやゆら？

warabigwinu asiga
taruga yayura?

○虎千代

我や花城
里之子が嫡子、
虎千代だやべる。
首里みやだいら濟まぢ
戻る道すがら、
人の道端に

wan ya hanagusiku
satunushiga chakushi,
turajuu dayabiru.
shuyimedei simaci
muduru michisigara,
fitunu michibatani

倒て居やべすが、
投げとかれやべめ
捨てとかれやべめ。
我身が懐に
水瓶の有やべもの
食物の有やべもの。
おしやがやい力
つけ召しやべれ。

tooti wuyabisiga,
nagitokariyabimi
sittokariyabimi.
wamiga fuchukuruni
mizibinnu ayabimunu
kammimnu ayabimunu
ushagayayi chikara
tsiki mishebiri.

（恵中、虎千代からもらった水を飲み、握り飯を食べる。）

○恵中

有難たい事よ。
すで果報どやゆる。

arigatee kutuyu.
sidigafudu yayuru.

命救て呉たる
事の嬉しや。
nuchi sikuti kwitaru
kutunu urisha.

○虎千代

され、座主加那志
御尋しやびいすが、
御身胴大和から
渡てめんしやうち、
太鼓と鉦打ちやい
念仏ゆ唱て、
御仏ぬ道ゆ
探まいてをやべいみ？
sari, zasiganasi,
utazinishabiisiga,
unju yamatukara
watati 'mensoochi,
tekutu kani uchayi
nimbutsiyu tuneti,
mifutukinu michiyu
tuneti wuyabimi?

○恵中

御仏ぬ道や
行ち苦りしやあすが
太鼓鉦打ちやい
探まいどしゆゆる。
mifutukinu michiya
ichigurisha asiga
teeku kani uchayi
tumedu shuyuru.

○虎千代

され座主加那志。
あたに言やべいすが、
御願事だやべる。
我すた元祖から
能羽楽の道
思はまてちちやる
事もまた有すが、
sari zasiganasi.
atani 'yabiisiga,
unigegutu dayabiru.
wasita gwansukara
nufani gakunu michi
umihamati chicharu
kutun mata asiga,

さても座主加那志

satimu zasiganashi

打ち召しやいる太鼓と

uchimisheru tekutu

鉦と念仏の

kanitu nimbutsinu

面白さあやべもの。

umusa ayabimunu.

我や今樂に

wan ya nama gakuni

はまて居やべもの。

hamati wuyabimunu.

おの鼓打ちや

unu tsizin uchiya

習ち給ほれ。

narachi tabori.

○恵中

こへな乞や坊主に

kuhwina kuyabozini

習うこと無さめ。

narawu kutu nesami.

○虎千代

いかな悪し様に

ikana ashizamani

人の言ち居ても、

fitunu ichi wutin,

座主の打つ太鼓や

zasinu utsu tekuya

さても面白さ、

satimu umushirusa,

見事だやべる。

migutu dayabiru.

習ち給ばうれ。

narachi tabori.

御願しやびら。

unige shabira.

(しびらへの間、問がある)

○恵中

付ち肝どすれば、

tsichijimudu siriba

かなし肝しゆん。

kanashijimu shiyun.

まこと肝美らさ
makutu chimujurasa
あだにしゆめ。
adani shiyumi.
習ち取らさ。
narachi turasa.

○虎千代
御拝だやびる
nifee dayabiru
座主前、
zasimee,
恩義だやびる。
wunji dayabiru.

○恵中
我や北方の
wan ya nishikatannu
安仁屋村寺に、
annya muradrani,
あたら身ゆ寄せて、
ataramiyu yushiti,
命繋ぢ居もの。
nuchi chinaji wumunu.

まこと太鼓鉦の
makutu tekuganinu
習い欲しやあらば、
narayibusha araba,
むまなかい来うやう、
mmanakai kuuyo,
かなし童。
kanashi warabi.

（恵中起き上がり、静かに鉦を打ち、念仏を唱えながら、幕に入る。）
（虎千代、しばらくして、鉦の余韻の中、続くように幕に入る。）

【第1部終わり】

【第2部】

（数ヶ月後、安仁屋村寺近くにて）

◇早作田節

風に誘われて
野に出でて見れば
風車も連れて
巡る嬉しや

kajini saswariti
nuni 'njiti miriba
kajimayan tsiriti
miguru urisha

（二人の若衆姿の童たちが風車を持って、登場する。同じ年頃の童である亀松が小僧のような姿で後に続いて登場する。）

○亀松

やあ、友小よ
やあ、友小よ。
互におし連れて
語て遊ば。

yaa, dushigwaayu
yaa, dushigwaayu.
tageni ushitsiriti
katati asiba.

（他の童たちは亀松をいじめぬ。）

○童1

何んで友言ゆが、
親居らぬ小僧。

nundi dushi iyuga,
yua wuran kuzuu.

○童2

母親やまさか
やかれよも座主小。

fafa uyaya masaka
yakari jumu zasigwa.

童3

男、子ゆ生しゆる
世界ぬまた有ゆみ？

wikiga kwaju nashuru
shikenu mata ayumi?

童1

素性知らぬ者と suzo siran munutu
友むつれすれば、 dusi mutsiri siriba,
嫌なぐしど付ちゆる yamagushidu tsichuru
嫌な道ど踏みゆる。 yamamichidu kumyuru.

童2

やかれよも座主が yamari yumu zasiga
島妻ゆ探まいて shimatujiyu tumeti
産しみたる童 nasimitaru warabi
あれやあらに？ ariya arani?

童1

いや、推参な小僧。 iya, siisanna kuzuu.
(童1、童2に拳骨を喰わせる。)

童3

おがが父親や ugaga chichi uyaya
よも座主ゆやれば jummu zasyiu jariba
おがが母親や ugaga fafa uyaya
地獄さらめ？ jiguku sarami?

童1

いや、 iya,
推参な小僧めが。 siisanna kuzuumiga.

(童1、童3に拳骨を喰わせる。そして、三人の童たち、哄笑しながら、
亀松を相手にせず幕に入る。)

○亀松

我んや亀松。

wan ya kanimatsi.

哀れこの我身や arari kunu wamiya
 生まれらぬ生まれ、 'mmariran 'mmari,
 十に足らぬ内に tuni taran uchini
 十に満たぬ内に tuni mitan uchini
 父に捨てられて chichini sitirariti
 母に捨てられて fafani sitirariti
 寄る辺方無らぬ yurubi kata neran
 頼る方無らぬ。 tayuru kata neran.
 かなし面影や kanasi umukajiya
 どくまさて立ちよて duku masati tachoti
 朝夕泣き暮らち asayu nachi kurachi
 ねぶる夜も寝らぬ。 niburu yun niran.
 安仁屋村寺に annya muradirani
 あたら身ゆ寄せて atara miyu yusiti

日々の物食みやい fbinu munu kamayayi
 命繋ち居たす nuchi tsinaji wutasi
 逃げて逃れらぬ nugiti nugariran
 暮らしまたやれば、 kurashi mata yariba,
 今日も村寺に chuun muradirani
 戻て行ちゆん。 muduti ichun.

○比屋定節

朝夕かにくれしや asayu kani kurisha
 両親も居らぬ futa uyan wuran
 あたら命繋ち atara nuchi tsinaji
 暮らす浮世 kurasu uchiyu

（亀松、一人で寺に帰る。太鼓の響きが聞こえる。太鼓の音は次第に大きくなってくる。亀松、寺の前に立つ。太鼓の鳴るのが一旦は止む。）

○亀松

亀松どややべいる。 kamimatsidu yayabiru.
戻て来やべたん。 muduti chaabitan.

○恵中（橋掛の奥より声）

やあ、亀松よ yaa, kamimatsiyu
入やうれ、入やうれ。 iyoori, iyoori.
我す達稽古方 wasita chiikugata
しゆるばんじやすが、 shuru banji yasiga,
やがて終ゆこと yagati uwayukutu
聞ちん済みゆぞ。 chichin simyusa.

（亀松、控えて座る。恵中と虎千代、パーランクーを持ち、橋掛より出る。）

◇揚作田節

広さある世界に frusa aru shikeni
まこと一筋の makutu ftusizinnu
思いぬ有て結ぶ uminnu ati musibu
御縁さらめ guyin sarami
（恵中、虎千代に向かって言う。）

○恵中

やあ、虎千代よ。 yaa, turajuyyu.
今日も稽古方 chuunn chiikugata
互に思はまて、 tageni umihamati,

おの閉ぢめさなや
互に打ち見だな。

unu tujimi sanaya
tageni uchi ndana.

（恵中と虎千代、パーランクーを持って、互いに合わせるように踊り打つ。）

◇仲順流れ

仲順流れや

chunjun nagariya

七流れ

nana nagari

黄金の囃子や

kuganinu hayashiya

七囃子

nana hayashi

親御の御顔や

uyagunu ukawuya

覚出ぢやち

ubi 'njachi

親御の御恩や

uyagunu guwunya

忘ららぬ

wasiraran

○恵中

たうたう、

tootoo,

出来た出来た。

dikita dikita.

（恵中は亀松の横に控えて座る。今度は、虎千代が一人でパーランクーを高らかに打つ。）

◇揚口説

天と地の間

tintu jinu 'weda

楽の音の

gakunu ninu

響ぎ渡るは

fbichi wataruwa

この世界の
世果報祝ゆる
しるしさめ

kunnu shikenu
yugafu iwayuru
shirushi sami

さても見事な
清ら二才の
鼓太鼓打ち
中辺飛ぶ
鳥も淀みやい
聞ち居ゆさ

satimu migutuna
chura nisenu
tsizin tekku uci
nakabi tubu
tuyin yudumyayi
chichi wuyusa

○亀松

やあや、虎千代！
さあさ、はいや！

yaaya, turajuui!
saasa, hayiyai!

我んにも
打たち給ばうれ。

wannin
utachi taboori.

（亀松、恵中からパーランクーを受け取り、虎千代と楽しく互いにパーランクーを打ち合う。太鼓打ちが一段落したところで、恵中が述べる。）

○恵中

いや、したりしたり。
見事見事。
この童肝の
親に捨てられて、
百苦れしやしゆたる
事やいな昔。
今や虎千代の

iya, shitayai shitayai.
migutu migutu.
kunnu warabi chimunu
uyani stitariti,
mumu kurisha shutaru
kutuya ina mukashi.
namaya turajuunu

打ちゆる太鼓聞きやい uchuru teku chichayi

心晴れ晴れと kukuru haribartu

なとる嬉しや。 natoru urisha.

やあ、虎千代、 yaa, turajuu,

我が習ちからや waga narachikaraya

日や浅さあすが fya asasa asiga

生まり付ち才の 'mmarizichi seenu

備わてがやゆら。 sunawatiga yayura.

天からど鳴響む tinkaradu tuyumu

地からど響く。 ziikaradu fbiku.

我肝まで勇で、 wa chimumadi isadi

聞ち事どやゆる。 chichigutudu yayuru

今一度打ちやい nama ichidu uchayi

聞かち呉れよ。 chikachi kwiriyu.

○亀松

今一度、 nama ichidu

聞かち給ばうれ！ chikachi tabooril

（虎千代が再びパーランクーを打つ。ところが、そこに割って入る者が・・・）

○首里からの使者

やあやあ、 yaayaa,

うまの御侍！ 'mmanu usamuree!

一だんな事よ！ ichidanna kutuyui!

一だんな事よ！ ichidanna kutuyui!

○虎千代

何事がやゆら？

nuugutuga yayura?

○首里からの使者

親国の一大事！ 'weguninu ichideeji!

あがと大和から agato yamatukara

戦押し寄せて ikusa ushiyushiti

御万人の間切り umanchunu maziri

奪いとらんしゆもの。 'mbayituran shumunu.

急ぎ首里かへ isuji shuyikayi

戻れやう！ muduriyoo!

（虎千代、使者とともに慌しく退場）

◇本花風節

浮世灘安く uchiyu nadayasiku

渡り欲しやあすが watayibusha asiga

嵐立つ波に arashi tatsu namini

自由やならぬ jiyuya naran

（後に残された恵中と亀松、幕に入る。）

【第2部終わり】

【第3部】

（虎千代の許婚・真加那、橋掛より出る）

◇仲順節「出羽の歌」

波の荒れらはも naminu arirawan

風の荒れらはも kajinu arirawan
 里の出立ちや satunu 'njitachiya
 糸の上から itunu 'wikara

○真加那

今出ぢる我身や nama 'njiru wamiya
 仲里のなし子 nakazatunu nasigwa
 真加那。 makana.

聞けば首里親国 chikiba shuyi'weguni
 一大事てやり。 ichideji tyari.

罪科も無らぬ tsimitugan neran
 身に覚も無らぬ mini ubin neran

あたに大和から atani yamatukara
 戦おし寄せて、 ikusa ushiyushiti

わすた琉球よ wasita ryuuchuyu
 奪い取らんしゆもの。 'mbayituran shumunu
 やすが、 yasiga,

我身が約束ゆ wamiga yakusukuyu
 済まちある虎千代 simachi aru turajuu,

堪力あもの teejikara amunu
 勇ましさあもの。 isamashisa amunu.

臣下の達ともに shinkanucha tumuni
 百勇み勇で、 mumu isami isadi

必ずや戦、 kanaraziya ikusa
 押し退ける筈よ。 ushinukiru faziyu.

ああ、虎千代。 aa, turajuu.
 無事にこの戦 bujini kunu ikusa
 討ち果たち済まち uchihatatachi shimachi

戻て来ち給ばうれ muduti chichi tabori
御願しやびん。 unige shabin.
我や堪も無らぬ wan ya ten neran
女身どやすが、 winagumidu yasiga,
手擦り願い込めて tiziri nige kumiti
セジの念入れて shijinu nin iriti
御祈りゆしゆもの uyinuyiyu shumunu
御崇べゆしゆもの。 utakabiyu shumunu
大和戦の達 yamatu ikusanucha
祈り退けらなや。 inuyi nukiranaya.

（真加那、軍撃退の祈りのオモロを唱える）

（『おもろさうし』第一、十七番より）

聞得大君ぎや chikwii uujimigya
せぢ鳴響み精軍 shiji tuyumi siikusa
 島打ちの 鳴響み shima uchinu tuyumi
鳴響む精高子が tuyumu sidakakuga
せぢ鳴響み精軍 shiji tuyumi siikusa
 島打ちの 鳴響み shima uchinu tuyumi
聞ゑ按司襲いぎや chikwii anji usuyigya
せぢ鳴響み軍 shiji tuyumi ikusa
 島打ちの 鳴響み shima uchinu tuyumi

（戦に出る装束の虎千代、橋掛より出る。）

◇恩納節

人や情無ぬ
ftuya nasaki nen
戦世になれば
ikusayuni nariba
かなしふやかれも
kanashi fuyakariri
すらななゆめ
sirana nayumi

○虎千代

やあ、かなし真加那、
yaa, kanashi makana,
聞ちとめて取らせ。
chichitumiti turashi.
あが遠大和から
agato yamatukara
戦押し寄せて、
ikusa ushiyushiti
首里親国の
shuyui 'weeguninu
一大事だいもの
ichideeji demunu

みやだいら重ねとる
medei kasanitoru
御主加那志御為、
ushuganashi udami,
今ど出立ちの
namadu 'njitachinu
際になとる。
chiwani natoru.

○真加那

思里と連れて
umisatutu tsiriti
行き欲しやどあすが、
ichibushadu asiga,
女生まれたる
winagu 'mmaritaru
ことの恨めしや。
kutunu ramisha.
無事済まちやがて
buji simachi yagati
戻て来ち給ばうれ。
muduti chichi tabori.

○虎千代

首里親国御為

shuyi'weguni udami

ほこらしやどあすが、

fukurashadu asiga

かなし思無蔵と

kanashi umi nzotu

別るとめば。

wakaru tumiba.

◇東江節

かなし思無蔵と

kanashi umi nzotu

別るとめば

wakaru tumiba

（虎千代、幕に入る。）

◇東江節

命の有る間や

nuchinu aru 'wedaya

島とまいていまづれ

shima tumeti imori

一期何時までも

ichigu itsimadin

待ちゆらだいもの

machura demunu

（真加那、幕に入る。）

【第3部終わり】

【第4部】

◇金武節

照る太陽や西に

tiru tidaya nishini

ぬち雲や靡ち

nuchigumuya nabichi

海の波までも

uminu namimadin

赤く暗く

akaku kuraku

（惠中と亀松が橋掛より入る。二人は門付けで家を廻っている。）

○亀松

されされ、 sarisari,

ゆしれやぐら。 jushiriyabira.

これや kuriya

托鉢の僧、 takufatsinu soo,

御情 unasaki

御給びみしやうれ。 utabimishoori.

○（家の奥からの声）

こまや何も無らぬ。 kumaya nun neran.

帰れ帰れ。 keeri keeri.

（惠中と亀松、別の家の門前に行く。）

○亀松

されされ、 sarisari,

ゆしれやぐら。 jushiriyabira.

これや kuriya

念仏の僧、 nimbutsinu soo,

御情 unasaki

御給びみしやうれ。 utabimishoori.

○（家の奥の声から）

御仏の甘世 mifutukinu amayu

有らち給ばうれ。 arachi tabori.

南無阿弥陀仏 nam amidabutsi

南無阿弥陀仏

nam amidabutsi

（家の奥の人は戸口から手を出して米を托鉢に入れる。恵中と亀松、恵みを施してくれた家に向かって深々と礼をする。そして、二人の道行。）

◇散山節

波の声や知らせ naminu kwiya shirashi

風の声や知らせ kajinu kwiya shirashi

面影の立ちゆる umukajinu tachuru

彼が行方

ariga yukuyi

（真加那、出る。海の近くで、虎千代の無事帰還を待つ真加那のもとに、恵中と亀松が出くわす。）

○恵中

おやぐめさあすが

uyagumisa asiga

御尋ねゆしやべら。

utaziniyu shabira.

むまや花城

'mmaya hanagusiku

里之子が嫡子、

satunushiga chakushi

虎千代と、

turajuutu,

約束ぬ有ゆる

yakusukunu ayuru

御方あやべらに？

ukata ayabirani?

○真加那

おう、我や

uu, wan ya

仲里のなし子

nakazatunu nashigwa

真加那だやべる。

makana dayabiru.

かなし思里と

kanashi umisatutu

約束ゆ交わち、 yakusukuyu kawachi
あれが戻ゆすや ariga muduyusiya
今ど待ちやべゝる。 namadu machabirru.

○恵中

虎千代の戻り turajuunu muruyi
待ちめしやいべみ。 machi mishebimi?
我身んうらつらさ wamin ura tsirasa
言い苦しやあすが、 iyigurisha asiga
虎千代が事や turajuuga kutuya
言やんで 'yandi
濟みやびらぬ。 simyabiran.
かなし虎千代や kanashi turajuuya
出ぢやる戦をて 'njaru ikusawuti

討ち死にゆされて uchijiniyu sariti
この世居やべらぬ。 kunnyu wuyabiran.

○真加那

あけやう、 akiyo,
やかれよも座主が yakari yumu zasiga
何が言ゆらとめば、 nuga iyura tumiba,
またも嘘物言い matan yukusimuni
百の憎さ。 mumunu nikusa.

○恵中

無常な世やんてやり mujona yu yan teyi
濟まち置かりゆみ。 simachi ukariyumi
あたら若者よ atara wakamunyu

先にやらち。

sachini yarachi.

○真加那

やかれよも座主が

yajari yumu zasiga

嘘物言い言ゆな。

yukusi muni iyuna.

我が里や今に

waga satuya namani

戻ていまいん。

muduti imen.

（静けさの中に遠くから太鼓のような音が聞こえる。その音は徐々に大きくなり、ついには舞台に虎千代を先頭にした一団が現れる。）

◇大主出羽手事

○真加那

ああ、思里よ。

aa, umisatuyu.

戻ていまうち。

muduti imochi.

（真加那 虎千代に駆け寄る。しかし、虎千代に触れようとしても触れられない。）

○真加那

ああ、思里よ。

aa, umisatuyu.

きや

cha

しめしやうちやが？ shi mishochaga?

◇東江節（アーキー）

いぎやしちやる事が icha shicharu kutuga

○虎千代（亡霊）

ああ、思無蔵よ。 aa, umi nzoyu.

我やこの世界に wan ya kunu shikeni

生ち欲しややあすが、 ichibushaya asiga,

戦世の習や ikusayunu nareya

思い果たさらぬ umui hatararan.

○真加那

ああ、思里よ。 aa, umisatuyu.

御身胴先立てて unju sachidatiti

世界に居てのしゆが。 siken i wuti nu shuga.

我身一人こまに、 wami fchuyi kumani,

残ちいまいみ？ nukuchi imemi?

○虎千代（亡霊）

ああ、思無蔵よ。 aa, umi nzoyu.

一つ願事の fitutsi nige gutunu

あてどこま来ちやる。 atidu kuma chicharu.

うまの座主のもと 'mmanu zasinu mutu

童亀松や、 warabi kamimatsiya,

親に捨てられて uyani sitirariti

頼る方無らぬ。 tayuru kata neran.

たんで引き取やい tandi fchituyai

我が子んで思て waga kwandi umuti

かなさ守い育て kanasa muyisudati

立派しち呉れよ。 dippa shichi kwiriyu.

○真加那

ああ、思里よ。 aa, umisatuyu.

○虎千代（亡霊）

先に行く我身ゆ sacini yuku wamiyu
許ち取らせ。 yuruchi turashi.
ああ、思無蔵よ。 aa, umi nzoyu.

○真加那

ああ、思里よ。 aa, umisatuyu.
いつも面影や itsin umukajiya
肝に留め置ちやい chimuni tumi uchayi
童神育て warabigami sudati
立派しゅもの。 dippa shumunu.

◇東江節

童神育て warabigami sudati
立派なさな dippa nasana

（真加那、恵中のところへ行つて亀松を引き取る。亀松涙が止まらない。虎千代、恵中に会釈する。虎千代音頭を取つてエイサー太鼓の仲間達に呼びかけ、太鼓を打ち鳴らす。虎千代に引き連れられたエイサーシンカヌチャーが海の彼方へと消えてゆく。今生の別れ。）

◇花笠節

この世の名残も kunnyunu naguyin
振り捨てゆんでち huyisityun dichii
思い思ても umuyi umutin
肝痛さ苦りしやの chimuchasa kurishanu
別れ涙さめ wakari nada sami

鳴らしゆる太鼓の音 narashuru tekunu ni
肝から勇みて chimukara isamiti

| | |
|---------|--------------------|
| 天まで届け | timmadi tuduki |
| 命の響きや | inuchinu fibichiya |
| 聞ちが居ゆら | chichiga wuyura |
| 御万人揃とて | umanchu suritoti |
| 弥勒世願らな | mirukuyu nigarana |
| 太鼓鳴らしやい | teeku narashayi |
| 囃子ん出来らち | feeshin dikirachi |
| 世界に鳴響ま | sikeni tuyuma |

| | |
|--------|--------------------|
| 忘んな命や | washinna inuchiya |
| 親から授かて | uyakara sajakati |
| 後の世まで | atunu juumadi |
| 真実伝えて | shinjitsi tsiteeti |
| 繋ち行ちゆる | tsinaji ichuru |

◇高祢久節

| | |
|-----------|--------------------|
| 胸ゆだくめかち | niju dakumikachi |
| 打ちゆる太鼓の音や | uchuru tekunu niya |
| 弥勒世ゆ招く | mirukuyuyu maniku |
| しるしさらめ | shirushi sarami |

（消え行く太鼓の残音を遠くに聞きながら、拍子木鳴り、真加那、亀松、
恵中退場。）

【第4部終わり】

（完）

(注) この台本の元は沖縄県立芸術大学大学院のレポートとして二〇〇三年に創作したものである。本レポートを四百字原稿用紙に換算したところ、おきなわ文学賞の規定枚数には足りなかった。ゆえに今回、一部加筆修正を行って規定枚数に足りるようにした。

※ローマ字表記は、伊波普猷『校註琉球戯曲集』に倣った。ただし、長音は母音を重ねて表記した。

(例: エー→ee、トー→too)

○参考文献

池宮正治 一九九〇『沖縄の遊行芸―チョンダラーとニンブチャー―』ひるぎ社

伊波普猷 一九九二「一九二九」『校註琉球戯曲集』榕樹社

宜保榮治郎 一九九七『エイサー―沖縄の

盆踊り―』那覇出版社

島袋盛敏・翁長俊郎 一九六八『標音評釈 琉歌全集』武蔵野書院

外間守善 二〇〇〇『おもろさうし』(上・下) 岩波文庫

宮良当壮 一九八〇「一九二五」『沖縄の人形芝居』『宮良当壮全集第十二卷』所収 第一書房